廣池千九郎をめぐる神道学的研究緒論（一）

――道徳における廣池千九郎の位置――

橋本富太郎

目　次

はじめに
一、廣池千九郎略歴
二、廣池没後の展開
三、道徳の研究・教育における廣池の位置
四、廣池生前の状況
おわりに

はじめに

本稿は、廣池千九郎をめぐる神道学的研究の緒論の前段部分に当たる。

ここでいう神道学的研究とは、廣池の事跡と思想を神道との関連を中心に検討しようとするものである。廣池はさまざまな分野に足跡を残し、神道の分野にも皇室や神宮、国学などに関連して優れた業績があった。また、畢生の大著『道徳科学の論文』に普遍化された道徳論の中には、世界のすぐれた思想とともに、神道の要素が多く取り入れられている。

そこでまず、廣池に関する研究史を辿り、神道的な観点（皇室・神宮・日本の精神文化等）において現時点でどこまで明らかにされているのかを確認しておきたい。本稿ではさらにその前提として、まず廣池とその後継者たちの事跡を概観し、廣池在世当時から現在までの彼らの置かれている位置を把握することを目的としている。

なお、本稿中「廣池」と「広池」の書体の相違は原文の表記による。敬称および敬語は省略させていただいた。

一、廣池千九郎略歴

廣池千九郎は、慶応二年（一八六六）現在の大分県中津市に、農家の長男として生まれた。小学校を卒業後、中津市校において実学および洋学を学び、小川含章のもとで漢学を修めた。国学については、井上頼圀の指導を受け、渡辺玄包について研鑽している。小学校教員を勤める傍ら『新編小学修身用書』全三巻を著わすなど道徳教育に尽力しつつ、『小学歴史歌』執筆に見られるように歴史教育にも力を入れていた。また、就学率向上のため、自ら夜間学校を設立し、巡回授業を行うなど、早くから学校教育の充実を企図実践している。やがて『中津歴史』（明治二十四年）を完成させると翌年教員を辞し、歴史家を志して京都に出て、自ら出版社を興し月刊誌『史学普及雑誌』を創刊する。

雑誌の主筆、編集および営業をほとんど一人で行い、その間に『皇室野史』、『日本史学新説』なども著わしながら史学をとおして大義名分を説いていた。途中『平安通志』や各地の寺史の編纂にも従事している。こうした活動が井上頼圀の評価するところとなり、『古事類苑』編纂員に推挙された。廣池は雑誌を第二十七号で終刊させると明治二十八年、東京に出る。

『古事類苑』では、「神祇部」「法律部」「文学部」等を手掛け、編集長佐藤誠実の信任を得て「宗教部」についてはほぼ全てを独力で完成させるなど執筆量は編纂員の中で最も多く、全体の四分の一に達している。

『古事類苑』と並行して、廣池は穂積陳重に師事するとともに漢学の素養を生かし、中国の法制史を専門的に研究するようになった。その過程で『支那文典』を著わし漢文法の体系化に成功すると早稲田大学講師となり、そこで法制史も担当することになった。やがて日中の歴史法学的比較研究を確立して東洋法制史と名づけ、同大に講座を開設するとともに明治三十八年『東洋法制史序論』を著わした。

明治四十年、『古事類苑』完成にともない廣池は神宮皇學館教授に招聘され、はじめは法制史、漢文法等を講じていたが、新たに「神道史」講義が設けられるとそれも担当することになり、翌年には『伊勢神宮』を執筆している。神道史教育の一環で現代神道（教派神道）を研究するとこれを高く位置づけ、特に天理教に深い関心を示し、入信する。大正元年には、「支那古代親族法の研究」で法学博士の学位を授けられるが、ちょうどそのころの死線さまよう病を機に、大正二年、天理教団からの招きに応じて皇學館を辞し、同教本部役員（教育顧問・中学校長）に就任する。

大正四年、教典に関する発言が問題となり教団本部を追われると、学者の仕事に専念することとなり、年来の儒学や東洋法制史、神道・仏教などの研究成果と自然科学の方法および小学

校教員以来の道徳教育における経験を生かして道徳科学の新たな体系化に取り組む。同年『神社崇敬と宗教』『伊勢神宮と我国体』、翌五年『日本憲法淵源論』など、関連領域から道徳をとらえていき、大正十五年『道徳科学の論文』を完成させるとこの年、道徳科学研究所を設立、独自の道徳論「モラロジー」を提唱する。モラロジーは、第一に、道徳実行の効果について科学的な証明を試みることと、第二に、従来行われてきた因襲的道徳「普通道徳」とは別の次元に、四大聖人（孔子、釈迦、キリスト、ソクラテス）それぞれの系統と、天照大神の系統すなわち日本皇室を加えた五つの系統に伝わる高度な道徳を「最高道徳」と称して解明することの二点を主眼とした。

モラロジーに基づき、労働問題の解決や教育・経済の立て直しなどについて全国を講演して回るうちに支持者が集まり、道徳を集中的に学ぶ「講習会」も盛況となった。斎藤実首相ら政界の支援を得るとともに、鈴木貫太郎軍令部長、大迫尚道陸軍大将らにより陸海将兵への教育にも求められ、特に財界に歓迎されるなどして学校建設の機運が高まり、現在の千葉県柏市に用地を得ると昭和十年、道徳科学専攻塾を開いた。

晩年の廣池は引き続き様々な要求に応じたが、とりわけ賀陽宮恒憲王への御進講には力を尽くしている。恒憲王は昭和十二年から十三年、十回に渡る廣池の講義を受けモラロジーを自らの指針とするに至っている。講義の主な内容は後に『大義名分の教育其必要と原理及び方法』となって刊行された。

御進講に最後の力を使い果たした廣池は十三年（一九三八）六月、静養先の群馬県大穴温泉で没している。

二、廣池没後の展開

（一）モラロジー研究所と廣池学園

廣池千九郎が逝去すると、その長男であり道徳科学研究所次長であった廣池千英（一八九三～一九六八）が、研究所所長および専攻塾塾長を直ちに継承した。この路線は千九郎自身によって敷かれたものであり、はじめのうちは順調であったが、世相の変化により困難を来すことになった。

当時日本は、すでに国家総動員法も施行されて戦時体制に入っており、道徳科学研究所内においても、戦争協力か否かの論争や政治勢力の侵入などにより、混乱が生じていた。そこで千英は事態の収拾のため、専攻塾における学校教育のみを残し、昭和十六年二月八日、研究所を閉鎖するという行動に出ている。さらに専攻塾の方も、別科が昭和十五年十二月修了の第十二回で廃止となっており、本科を残すのみになった。その上、専攻塾は徴兵猶予のない特殊学校であったため次々と徴兵を受け、塾生は減少する一方であった。

このような状況の下、千英塾長は、学校経営に専念すること

によって難局をしのぎつつ、モラロジー教育の生命をつなぐことを期して、財団法人の設立と専攻塾の専門学校化を図っている。こうして昭和十七年二月二十五日、財団法人廣池学園と、その経営による東亜専門学校設立の認可を得ることとなった。

千英は、専門学校の経営と教育によってかろうじて組織の命脈を保ち、戦時下を潜り抜け終戦を迎えると、昭和二十一年二月八日、研究所の復活を宣言する。「道徳科学研究所復活に際しての所長声明書」には、「道義頽廃シテ国敗レ国敗レテ道義愈々頽ルノ実情」は慨嘆に堪えず、「道徳科学研究者ノ憤起スベキ秋デアルト確信致シマスノデ道徳科学研究所ノ復活ヲ決意シ各位ノ熱望ニ応ヘ以テ本研究所本来ノ使命タル道義日本ノ建設ニ邁進セントスルモノデアリマス」[1]との想いがつづられている。

多くの国民は敗戦のショックで茫然自失し、千英の指摘するように「日本本来の使命と日本人本来の姿を忘却して只自己の小さな欲望に日夜汲々として」、「人の幸福の為にとか真実勇気勤勉とか特に慈悲寛大自己反省を忘れて醜悪な野獣の生活に没入」[2]しているかのような有様であった。

このように道徳に対して否定的もしくは無関心な大勢との間に溝はあったが、道徳教育を志向する層の支持を受け、道徳科学研究所は教育成果を上げていった。研究所復活声明の同年七月には、廣池ゆかりの群馬県谷川温泉において第一回谷川夏期講習会（六日間）を開催すると、十月には『道徳科学および最高道徳の概要』を刊行、それにもとづく講習会を千葉県の本部をはじめ、地方では大阪、高崎を皮切りに全国展開していった。翌二十二年には研究所を財団法人化している。学校教育の方では、二十三年、道徳科学専攻塾高等部（現在の麗澤高等学校）を開校、二十五年麗澤短期大学開学、三十四年には四年生に改組し麗澤大学を開学した。また、三十六年には麗澤瑞浪高等学校も開校している。

講習会開催は順調に推移し、昭和三十年度には地方講習会が百二十二か所で開かれ、延べ五万四千人が受講している。同三十四年には瑞浪分園・瑞浪社会教育センターを開設、続いて四十六年福島、四十七年岡山、五十一年御殿場・四国・九州、そして五十四年北海道の社会教育センター開設と続いた[3]。

途中、学校教育関係者の研修にも力を入れ始めた。昭和三十八年から教育者研究会を開催している。岐阜県瑞浪市で開かれた第一回には、現職の教員、教育委員、ＰＴＡ役員など二百二十七人が参加した。以後毎年開催し、四十四年の第七回からは文部省の後援を得ている。その後会場が増え、平成二十五年には全国九十六会場で約一万人が参加し、この五十年間では延べ十六万人が参加した[4]。

（二）平塚益徳とJ・A・ラワリーズ

この教育者研究会に第一回から出講し、強力に支援するとともに、逝去するまでモラロジー研究所に協力を惜しまなかったのは、国立教育研究所所長（当時）平塚益徳だった。

平塚と研究所との最初の接点は、第三代所長廣池千太郎が九州大学在学時の指導教授を平塚が担当したことだった。その縁もあって平塚は研究所を訪問し、諸所のモラロジー関係の会において講演するなどの機会を持っていた。本格的に関わるようになったのは、前述の第一回教育者研究会への出講である。

平塚は、同研究会の講師担当を受諾したことについて、「わたくしは、モラロジーの会員の方たちこそ、現下わが国において最も重要な道徳教育を推進する中核体となるべきであり、その資格を十分具有しておると確信している者として、そうした計画が時宜に適ったものと判断して、少しでもそのお役に立ちうるならばという気持ちから、喜んでその申出をお引き受けした」[5]とのことであった。そして、この会で行われた講演を中心にまとめられ、「モラロジー関係の方々に味読され咀嚼されて、道義の国日本の建設の一助となりうれば」（本書「序にかえて」）と刊行されたのが、道徳教育関係者のみならず各方面に多大な影響を及ぼした『日本教育の進路―道徳教育の根本問題―』[6]である。平塚はそれ以来、亡くなる前年の昭和五十五年まで十八年間、一度も欠かすことなく教育者研究会に出講し続けた。

平塚はまた、モラロジーの発信にも力を尽くしている。昭和五十三年（一九七八）、ブルガリアで開催されたユネスコ主催による道徳教育に関する世界で初めての国際会議「現代世界の要請にもとづく学校問題と道徳教育の専門家会議」において、日本代表の発表資料「日本における道徳教育の主な出来事」に、一九二六年の廣池千九郎によるモラロジー樹立を入れるとともに、廣池千太郎を会議に出席させるよう取り計らい、「モラロジーとモラロジー教育」という英文資料の配布とスピーチの機会を作った[7]。

さらに、ジョセフ・A・ラワリーズ[8]との間をつないだことも大きい。ラワリーズから「クリスチャンであるあなたが、なぜモラロジアンになれるのですか」と問われたことに対して、平塚は「モラロジーを勉強すると、よりよいクリスチャンになれるのです」と答え[9]、同じくキリスト教徒であるラワリーズにモラロジーの研究を勧めている。

平塚はラワリーズのその後のはたらきを位置づけ、次のように評した。

> 周知のごとく、モラロジー研究所は、海外にも少なからぬ知己を与えられている。教育学の分野でも、ブルベッカー（米）、ドビンスン、ニブレット（英）、デルボラフ（西独）、ケーツ（カナダ）、ランゲフェルド（オランダ）

教授ら、それぞれが広池学園のよき理解者であられる。こうした諸碩学の間にあってラワリーズ教授は、まさにその代表者として来講されたわけであったが、上述のごとく、各地で行われた教授の名講演の内容そのものが、モラロジーについての深き研鑽と理解なくしては成り立ちえないものであった点で、すべての参加者をひとしく感激せしめたのである。[10]

ラワリーズは、折に触れて自らを「モラロジアン」と称し、精力的にモラロジーを研究し、教育への展開に務めている。分析の過程で四つの柱を立て、それぞれに神道、仏教、キリスト教、ソクラテスの流れを充て、さらに儒教の包括的な影響を指摘し、[11]「モラロジーの体系が内にもっている内容とその全き意味は、普遍的なものである」という認識を示しつつも、廣池の叙述については「外国人が最初に受ける印象は、それが日本的な表現で書かれている」[12]との課題を提起し、西欧的思想背景をもつ自身の言説と自然科学の観点を重視して新たな文脈によるモラロジーの叙述を試みた。ラワリーズはカナダのセントメリーにおける講演で、「モラロジーは、『最高道徳』の実行は、個人の幸福と社会一般の福祉を共に増進させるような、良い結果をもたらすものであることを科学的に示しています」[13]と言っているように、その科学的手法に理解を深め強調することに務めている。

(三) ローレンス・コールバーグと国際的ネットワーク形成

ハーバード大学教授、同道徳教育研究センター所長であったコールバーグ（一九二七～一九八七）は、道徳教育における研究開発と現場展開、そしてネットワーク形成において二十世紀を代表する足跡を残した。

コールバーグは、学校法人廣池学園創立五十年の記念行事に招かれた昭和六十年十月の初来日を契機にモラロジー研究者との接触が深まる。十二日間の日本滞在期間中に同研究所において研究会（三回）と講演（一回）が行われた。

コールバーグはその道徳論の中において、かつて「慈悲に対する正義の優位」を主張し、道徳の原理の中核に唯一、正義を置いていた。しかし、この来日を機会に廣池の最高道徳論を取り入れ、道徳性の最終段階である第六段階の位置に「正義と慈悲が一体両面」を論じるようになり、普遍的道徳原理について廣池に共通する認識を示していた。[14]

コールバーグはモラロジー研究所訪問を契機に次のような考えに至ったという。「道徳教育への国際的なアプローチが、歴史上初めて真に存在しうるのだという認識」と「この国際的アプローチとは、モラロジーと広池千九郎博士がたえず強調し、また私も強調してきた普遍的なものに基づくとともに、一方で、アメリカと日本のようなそれぞれの国の教育とその環境や方法に対する開かれた理解と、互いに学び合う意欲に基づくも

の」との考えである。[15] そして、コールバーグは道徳教育に関する国際会議をモラロジー研究所において開催することを提案し、そのことが日本で最初の道徳教育国際会議が同研究所において開かれる契機となった。昭和六十二年（一九八七）八月二十四日から二十七日、道徳教育国際会議「東と西の道徳教育――伝統と革新」が開催されている。さらに第二回「二十一世紀の道徳教育を求めて」が平成七年（一九九五）八月二十八日から三十一日、同研究所で開かれた。[16] この開催を機に同研究所において、またはその主催により道徳関連の国際会議が現在まで幾度か開かれるに至っている。[17]

三、道徳の研究・教育における廣池の位置

（一）評価と顕彰

以上のように、廣池千九郎とその提唱によるモラロジーは、教育学および道徳教育関係者によって一定の評価を得てきた。すなわち、その徳目の背景にある哲学的宗教的深みと、国際的普遍性および科学的手法、廣池自らの実践、さらに現代にまで続く社会教育と学校教育、そして将来的期待においてである。[18] それらの点について、廣池に触れる文献からさらにいくつか見てみよう。

山田孝雄編『近代日本の倫理思想』では、

> 従来の倫理学は、理論的・思弁的であって実践性に乏しく、他方宗教は実践性はあるが科学の裏づけを欠いて、ややもすると自己の宗派のみを尊び、他を排斥する傾向があるなど、不十分な点が多い。これに対して広池は、科学的根拠をもった普遍的で実践性のある道徳学としてのモラロジーを創建したのである。[19]

と、廣池の道徳の特色に、科学、普遍、実践の三点を挙げている。

中村元は、『道徳科学の論文』の「キリスト教・仏教・及び儒教に於ける因果律の教説」を指摘し、「道徳的な意味における、因果律、応報の観念を、東西にわたってこれほど詳しく検討した論文を、わたくしは知らない」といい、一宗一派にとらわれない普遍性を求めたことについては、「一つの宗教、あるいは一つの権威をかざして押しつけようとすると、他の宗教または他の宗派の人々が反撥する。教えが実際に効力を発揮しないことになる」として、廣池の「諸宗教を超えたもの」を追い求めた点を評している。[20]

最近では、日本道徳教育学会の中核メンバーによって編まれた『戦後道徳教育を築いた人々と21世紀の課題』において「天野、高山、高坂は戦後の道徳教育を方向づけ、廣池は道徳の科学的研究を方向づけた点において再検討に価する人々である」[21]と、天野貞祐、高山岩男、高坂正顕らとともに、戦後の道徳教

育を方向づけた四人のうちの一人に廣池を挙げている。

最後に、研究書ではないが、小説家山岡荘八の筆致にも触れておきたい。山岡は晩年を迎え、自身の戦争体験と将来の世界の危機を思う中、デニス・ゲーバーの「今世紀末までに、人類は、倫理革命を行わなければならない」という一語に出会い、「日本にもそうした考えでその生涯を『道徳科学』の研究に捧げた先人のあるのに思い至った」という。そして、「広池千九郎博士の伝記小説を書きたい」「現代の空隙を鋭く衝いた人物を最後の責任とし、楽しみとして書いてみたい」と念願するようになった[22]。さらに、「最高道徳こそ、わが国の国柄であり、日本の心である[23]」との確信のもと、「本気で、私の生涯の最後の仕事にするつもりで取り組まなければいけない[24]」という言葉そのままに、この小説『燃える軌道』全五巻執筆に最後の力を使いつくし、完成とともに逝去した。山岡は小説執筆をとおして、廣池の教育方針の「不動の根」を見出し、「この根は『最高道徳』と限定されてよい特異性をもって、日本国民すべての反省の中心、即ち伊勢大神宮の、神ながらの大道に結びついている[25]」という。そして、

現に伊勢大神宮に帰り着いて、新しい教育の門戸を開き直した広池博士の事業は千葉県光ヶ丘の一角だけではなく、全国各地で、美しい道徳とかたく結ばれて結実をはじめている。恐らくこの教育が道徳とかたく握手してある限り、利己の中心に自分を見失いかけている日本人たちの眼を覚まさせる警鐘になってくれるであろう[26]。

このように、廣池の遺した教育事業の根本理念と伊勢神宮とを結びつけ、道徳教育による日本再生の可能性にまで踏み込んでいた[27]。

(二) 埋没と断片化

こうした言及からもわかるとおり、廣池は教育学および道徳教育の歴史上、相応に位置づけられてきた。しかし、生前の多彩な活動や存在感、現代に至る道徳教育における位置から考えると、現時点での一般的知名度は相対的に低く、断片的理解が目立ち、研究対象として広い範囲から取り上げられることもなかったことが指摘できる。

それはいかなる理由によるものであるのか、次の三点から見ていきたい。第一に、廣池の最終的な活動の場が「道徳」であったこと、第二に、その「道徳」の説く内容に関する問題、第三に、宗教との関係である。

まず第一の「道徳」について述べよう。廣池は、学校教育振興、歴史書および事典編纂、東洋法制史開拓、漢文法体系化、国体研究と神道的求道など、いくつかの分野で足跡を残していたが、最終的にはそれらの業績を総合し、あるいは捨て去り、道徳の研究と教育に専心特化していた。このように人生のすべ

てを賭けた「道徳」であったが、戦後、廣池の生前とはその置かれている位置が一変してしまっている。

戦後日本の再出発の多くは、過去の清算から始まり、周知のとおり「道徳」はその最たるものであった。GHQにより修身教育は停止され、近代日本の道徳の根幹であった「教育勅語」は、衆参両院においてそれぞれ「排除」「失効」が決議された。そして大多数の教育者に「日本の伝統思想はすべて軍国主義につながるもの」とみなされ、「道徳は封建遺制」として否定されるに及ぶ[28]。「修身」に代わり、GHQによる民主化構想（初期理念）はあったものの、道徳教育に空白が生まれてしまっていたのだった。

それに対して、昭和二十四年以降、吉田茂首相とその意を受けた天野貞祐文相らによって道徳教育の復活の動きがみられた。しかしこれについても、貝塚茂樹によると、

一九四九年（昭和二四）以降の道徳教育の歴史こそは、「初期理念」を逸脱、否定したものであり、「教育反動化」としての「逆コース」の象徴的な分野の一つとして理解されたのである。そしてこのことは、戦後教育において、道徳教育がある種の「タブー」として存在し続け、道徳教育を口にすることさえも憚られる「空気」を形成したことと無関係ではない[29]。

と、天野らの働きは道徳教育における賛否の溝を埋めることにはならず、議論の停滞もしくは霧散を来していた。

こうして、昭和二十年まで築き上げられてきた日本の道徳教育も、それに献身してきた人物群像も、大多数の日本人の意識から失われ、記憶から消去される事態となった。前に廣池を評していた『近代日本の倫理思想』も、「戦前には有名であり社会指導に有力な地位を占め世を裨益すること大なる倫理学者と雖も、今日は全く忘れられ、人名辞典にさえ殆ど出ていない[30]」という状況が同書編纂の背景にあったことを示している。

また、同じく中村元の『比較思想の先駆者たち』でも、教育者たちの道徳教育に対する拒否反応を指摘し、その状況下における平塚益徳の奮闘を評している。中村は廣池学園を介して道徳教育の現場で平塚と何度か接触していた。中村は平塚を尊敬する理由に、「道徳教育」ということを敢然と言い切っていたことを挙げている。「敗戦後には『道徳』という語は忌避され、『道徳教育』ということはとかく嫌悪されて来た。『不道徳』なことを言えば、またそれを実行すれば、世の中からはやし立てられ、ジャーナリズムに華やかに登場する」、「教育者自体があまり道徳ということを言わなくなってしまった傾向がある[31]」。このような状況下、平塚は、教育者でありながら敢然と「道徳」を主張し、前述のように廣池の道徳説と運動を支持していたのだった。

「道徳」が忌避されたのであれば当然、それを主唱した「廣

池」も、その支持者たちも忌避されたといえよう。こうして廣池は世間の認識から埋もれ、道徳以外の東洋法制史などの業績もろとも忘れられていった。

次に第二の、「道徳教育」そのものは否定しなくとも、内容を問題とするケースである。天野文相が昭和二十六年十月十五日、参議院本会議において「国家の道徳的中心は天皇にある」と発言したことに対する反発は大きかった。社会党の高田なほ子議員が、「少なくとも過去を清算する日本の民主化への大きな使命を果たすところの教育の理念が天皇であることは、今の新しい教育の理念を冒涜する考えではないか[32]」と批判していることなどからもわかるように、道徳教育において、天皇との関係は「封建遺制」として解消されるべきものとの考えは有力であった。

しかし廣池が、世界の五大道徳系統の一つに挙げ、恩人の系列の第一に挙げているのは、まさしく歴代「天皇」だったのである。

今でこそ、「天皇についての理解と敬愛の念を深めるようにすること」（「小学校学習指導要領 社会」〔第六学年〕）と、学校教育の基準に「天皇」が明記され方向が示されるようになった。しかし戦後数十年にわたって、天皇教育は忌避され、それを行う機関・学校は奇異に映り、ましてや道徳教育と結びつけるなどまったく想定外とされる世相が続いた[33]。現在においても例えば、小中学校で平成二十六年度から使用されることになった文部科学省の『私たちの道徳』では、国内外の偉人の物語が豊富に紹介されているにもかかわらず、元来道徳的事績に富むはずの天皇・皇族についてはまったく言及がない[34]。

こうして廣池の興したモラロジーによる研究・教育活動は、道徳を重視し、皇室を尊ぶ層からは支持を受けつつも、反対論者には無視もしくは排除すべき対象であり、無関心な大多数の国民には敬遠されるような状況を呈していた。

このような状況を背景に浮上し、さらにこの傾向に拍車をかけたのが、第三の宗教との関係である。上記のような道徳教育に対する戦後世間の位置づけは、同じく「道徳」的なことを唱えつつ、それとともに「信仰」をも説く、数多の新宗教教団に対するそれ――熱心な推進者と敬遠する一般大衆――と重なるものがあり、廣池の遺した道徳教育は新宗教運動との混線を生じることとなった。

宗教学者たちが廣池とモラロジー研究所の教育活動に関心を持つと、宗教学以外の研究領域からの関心が薄くなっている分、その宗教学的研究は学界における比重を高め、研究領域全体の中で関心の偏りが見られるようになった。

宗教学的見地からすれば道徳の「理論」は「教理」と解釈され、「教育」は「布教」と表現される。客観性・普遍性如何などは問題とならない。沼田健哉は、『現代日本の新宗教』の中

に「修養団体」に関する項を立て、その「活動」や「教え」を分析するとともに、いくつかの修養団体にモラロジー研究所を加え比較研究を行っている[35]。このような構図は島薗進にも引き継がれて[36]学界に浸透していった。

こうした研究は、膨大に存する宗教現象を、「教祖」「教理」「布教」「分派」などの構図を用いて整理し分析を加えることにより新宗教の全体的把握に大きな成果を上げてきた[37]。しかしその一方で、構図にあてはまらない要素は意識的無意識的に捨象されて検討されないという側面も持っていた。廣池による研究成果や教育事業の全体像が見渡されることはなく、「修養団体」の概念に当てはまる要素のみが抽出され、「教祖」像が浮上する結果を招いている。そしてさらに、モラロジー研究所を天理教に系統づける見方までも生じた[38]。

しかし実際には、研究所の元となった廣池の道徳科学研究と、天理教との関わりとは同時並行する別の系統であった。また、生きた事例として評価し、道徳論においてその教理を高く位置づけつつもそれは神道の展開としてであり、それ以上に儒教・仏教および自然科学の膨大な影響関係がある。

『近代日本哲学思想家辞典』における「広池千九郎」の項がいうように、「伊勢での大患、激増する労働運動への関心、天理教との軋轢などがきっかけとなり、広池は、それまでの東洋法制史、国体論の研究から、道徳科学（moral science, moralogy）を創唱し、その社会運動を展開するに至る[39]」と見るのが自然であろう。道徳科学へつながるものは、東洋法制史と国体論の研究というべきところであって、天理教との縁は、廣池の命を救った「恩人」であり、離職が研究に専念する「きっかけ」となった点など、重要な道徳的要素ではあるがそれとは次元の異なる問題であった。後進の法制史学者にいわせれば、モラロジーの提唱もそれにもとづく教育活動も、すでに法制史研究の段階で準備されていたものであって、彼らには天理教の影響は一顧だにされていない[40]。

それにもかかわらず混線が起きた背景には、前述のように廣池の事跡に関する認識が全般的に薄まっていることに加えて、新宗教をとりまく次のような事情があった。

新宗教教団においては、教団内の指導的立場であった人物が、教団と袂を分かち、一派独立して新しい教団を立てるというケースが多く見られ、例えば、天理教の宣教所長であった大西愛治郎が独立して新宗教「ほんみち」を創始したケースなどで、それらを系統づけることが新宗教研究の一つの方法としてこれもまた有効な手段であった。この構造は一部の修養団体の創始者たちにも当てはまるものがあり、さらにそれを事情の異なる廣池にまで覆いかぶせたのであった。

こうして廣池千九郎の事跡と思想は、教育学および道徳教育の分野で高く評価される一方、戦後日本の一般社会においては

埋没してしまい、その上断片的理解によって偏見が助長されるという結果を招来していたのである。

四、廣池生前の状況

以上のような状況を検証する一助として、廣池に対する生前（戦前）の客観的認識について報道等をもとにして若干詳しく見ておこう。

廣池が本格的に社会教育へ乗り出すに際して、その第一声を上げたのは昭和六年九月二十一日、大阪毎日新聞社における講演会であったが、このとき翌日の新聞見出しには「新科学モラロジー（ママ）を名士に説くきのふ本社で開かれた廣池博士の大講演」とあり、学者廣池千九郎による学術的研究成果の発表という認識だったことがうかがえる。廣池の紹介に立った新渡戸稲造の講演タイトルも「廣池先生の研究の世界的意義」と題し、「廣池先生がモラロヂーを唱道され或は忠孝の道を啻に従来の因襲のまゝに説かれないで、西洋の学術の基本に本づいて、科学の方法によつて、即ち昔風の論法に依らず、直観的考察にのみ囚はれずして、理論的に学術的にこれらの根本問題を説明されたといふに至つては、我々日本人として、大いに同君に感謝しなければならんところである」[41]と新渡戸はいっており、それが西洋ではなく、日本から発信されることの意義を強調している。この点は白鳥庫吉も、『道徳科学の論文』に寄せた序文に「本書ハ人類ノ実生活ニ関スル重要ナル幾多ノ根本原理ヲ発見シ、之を秩序立テテ一ノ学問的体系ト為セル点ニ於テ、之ヲ一ノ新科学トシテ発表セル、寔ニ偶然ノ出来事ニ非ルヲ信ズ」といい、廣池についても「其該博・精確且ツ綿密ナル研究ハ夙ニ日本ノ学界ニ於テ定評アル所」であり、モラロジーを近代科学的研究の成果と捉えた上に、「他面ニハ、深キ道徳的及ビ宗教的体験」を有しているという[42]。

しかし廣池の教育活動が急展開していたころには、やはり世間の耳目を引き、その盛況を揶揄するような報道もあった。

昭和八年五月には、読売新聞紙上において「廣池千九郎氏のモラロヂー　繁盛記」が七回にわたって連載している。急速に発展するさまが新宗教の教勢拡大に擬せられて「神道類似の半宗教運動＝知識階級に拡がる」と副題に掲げられる一方、「和製テクノクラシー」ともいい、科学者による組織的活動とも考えていた。

記事は、全体的に警戒感があり奇異な目で非友好的に書いているものの、モラロジーの内容については、天照大神と四大聖人の教えから来ているとしており、

廣池氏は法学博士で東洋法制史の専攻者である。伊勢神宮皇學館にも教授をしてゐた関係からその頃神道と国体との研究をしたが急に病気となつて一時天理教にも入つた、そ

の時は熱心な信者だつたが間もなく去つたとか去られたとか云はれている。その後、工場や会社で演説した経験から商工業者の弱点を知りモラロヂーを説く様になつた。経済だとか科学だとか国体だとか法制史と神道と常識で考え出した熟語のモラロヂーといふやうなものができた。本はそこだ。

といい、天理教とは廣池個人の病気との関係として、モラロジーのルーツはそれとは別の事跡に置いている。

その後「モラロヂー」が社会に浸透すると報道も落ち着いてくる。昭和十年に道徳科学専攻塾が開校すると、主要各紙は一斉に報じたが、専攻塾の概要と開塾式の模様、来賓の名前を淡々と述べており、盛大でありつつも穏当な催しと見做されていた。[43]

また当時は、廣池が温泉地に養生施設を建設するだけでニュースになるような時代だった。『時事新報』（昭和十一年十二月三日）には、「モラロジー（ママ）の廣池博士 魔峰谷川岳の神秘境に隠栖」と見出しを打ち、谷川と温泉施設について説明した後、「同博士は国体研究のため伊勢大廟に十年余奉仕し其後世界最高の道徳を始唱、研鑽二十年五千（ママ）頁に亘る道徳科学の書に依つて世界学界を驚異せしめ昭和八年（ママ）千葉県小金町に研究（ママ）専攻塾開設以来二万余名のモラロジー（ママ）教育受講者我国民文化の啓蒙運動に着手して今日に至つて居る」と解説して記事を閉じている。[44]

地方における教育活動についても盛んに報道されていた。名古屋地方におけるある講習会の開催を例にとってみよう。昭和十二年五月二十八日から三十日まで開催の名古屋第六回道徳科学講習会に関する報道をみると、『名古屋毎日新聞』（五月二十八日）では、見出しに「思潮界注目の的 道徳科学講習 愈よ二十八日から公会堂で 申込み二千名を突破」と掲げ、次のように解説している。

モラロヂーとは篤学と博識を以て知られ特に東洋法制史の大家法学博士廣池千九郎が四十年に亘る研究によつて完成された新精神科学の名であつて英語のモラル・サイエンス、日本語で道徳科学と称へられてゐる、その研究に従へば今日世界に行はれてゐる道徳の五大系統、即ち我日本の天照大神を中心とする惟神神道を始め孔子、釈迦、キリスト、ソクラテスの道徳系統に一貫する道徳の原理こそ最高道徳で、この原理、実質、実行の方法とその結果を歴史と社会学的資料と現代の自然科学とに照して科学的に考察し学問的体系に組立てたのがこのモラロヂー（以下略）。

学者廣池の研究成果たる「新精神科学」を学ぶ場と認識されていたことが理解される。

『名古屋新聞』も同日「時代に掉さす 新学説 道統科学 けふから講習会開く」と廣池の写真入りで報じている。『新愛知新聞』も同日「今夜から開く道徳科学講習」とあり、「法学博士

廣池千九郎氏四十余年研究に成るわが国体神道はじめ孔子、釈迦、基督、ソクラテス五聖教の最高道徳四千八頁の平易な講義をなしこれを行ふことによつて人間の真の幸福、健康繁栄を永久に得る道を教育しようとするもの」とする。

『大阪朝日新聞』（名古屋市内版・同日）も書き出しは同様だが、若干視点が異なる。

神ながら、孔子、釈迦、キリスト、ソクラテスの世界五つの道徳系統を貫く最高道徳の原理をもとめて新しく生まれた新科学モラロヂーが救世の叫びをあげて千葉県東葛飾郡小金町に道徳科学専攻塾が出現したのが三年まへ、一世の注目と批判に答へようと熱心なモラロヂスト名古屋市東区長久手町中井巳治郎氏の案内でモラロヂー生みの親法学博士廣池千九郎氏が二十六日来名、名古屋観光ホテルに関係者を招いて学説を説明した（以下略）。

「注目」とともに「批判」もあったことに言及している。廣池が事前に名古屋入りして「学説」の説明にあたり、理解が得られた模様である。ちなみに、中井巳治郎は賀陽宮恒憲王に廣池を紹介した人物で名古屋財界の重鎮であった。

終了後は「道徳科学の講習大盛況」「新旧聴講者は三千名を突破、青年、壮年、老年男女各階級を網羅して感激のうちに聴講してゐた」（『名古屋毎日新聞』、五月三十日）とのことである。なお、廣池自身はこの講習会には出講しておらず、講師は門下の三名だった。

廣池の逝去に際しても、当然のことながら主要紙は一同に報じている。

『大阪毎日新聞』は「『道徳科学』提唱者 廣池博士・謎の死」と題して「新精神科学の先駆」との小見出しに続いて略歴を記すが、「かつて早大の講師をしてゐたことあり、また天理教の独立運動[45]に際し道の人として活躍、その後天理中学、天理教校に教鞭をとつてゐたこともある」といい、また「〝天理教〟の恩人」との「諸井同教幹部」の談話を引いている。

そして、昭和十六年の道徳科学研究所解散については、『大阪日日新聞』（昭和十六年二月十五日）には見出しに「道徳科学研究所閉鎖」、続いて「全国に六十支部会員七十万を擁し本居平田両国学者の学流をつぐ道徳科学研究所（所長廣池千英氏）では今回新体制下に会員組織や研究会の如き団体的行動は面白くないとあつて同研究所並に全国支部出張所を一斉に閉鎖」とあり、国粋主義がより進んだ世相を反映してか、研究所の思想的系譜は「国学者」のみとなっている。

おわりに

以上のように、学界もマスメディアも廣池在世当時もしくは没後しばらくは、その全体像をよく理解していた。つまり、

『古事類苑』や東洋法制史、神宮皇學館での研究・教育などにより、廣池の人物像は学者の間はもちろん世間的にも広く認知されていた。途中一時的に天理教団に身を置いていたことについても当然理解されていたが、教団側に学識と経験を期待され、改革を試みたがうまくいかず、もとの鞘（学者生活）に収まったという見方が一般的であった。

ところが戦後となると、前述のような事情により、廣池とその後継事業に対する世間の位置づけは大きく変わった。否定もしくは無関心が世の大勢となり、関心を持たれる研究領域に偏りを生じている。彼らの道徳教育の実績は、こうした逆風の中にありながら積み上げられてきたのであった。

ところで近年の日本社会では、生涯学習への機運の高まり[46]や日本の歴史や伝統に対する意識の好転、道徳教育の必要性の再認識があることなどにより、廣池の業績が再評価されつつある[47]。平塚やラワリーズらが普遍的と評した廣池の道徳論は、その一方で、神道・皇室をはじめとする日本の伝統が色濃く反映されている。日本の「道徳」を再建していくことと、道徳における「天皇」および「神道」を再検討することは、同一線上にある課題ということができよう。

これからの日本の道徳を再興し、世界に発信していく上で廣池の人生を俯瞰して神道と道徳の関係を考察することの意味は大きい。このような環境および課題をふまえ、別稿になるが、続いて廣池千九郎の全体的研究史を概観する。そして次に、神道に関係する研究史を辿り、廣池千九郎とその道徳論の神道学的研究の現代的意義を明らかにしていきたい。

註

（1）道徳科学研究所編刊『道徳科学研究所紀要』第一号、昭和二十二年、二頁

（2）同、一頁

（3）研究所のこのあたりの歴史は、モラロジー研究所編刊『モラロジー研究所75年の歩み』平成十三年参照。なお「財団法人道徳科学研究所」は、昭和四十七年十一月十五日付をもって名称を「財団法人モラロジー研究所」に変更している（『モラロジー研究所所報』昭和四十七年十二月号）。

（4）モラロジー研究所編刊『教育者研究会50年の歩み』平成二十六年

（5）平塚益徳『日本教育の進路 ―道徳教育の根本問題―』広池学園出版部、昭和三十九年

（6）同書。午前・午後の二回の講演を第一部・第二部に、昭和三十六年三月に道徳科学研究所大阪講堂で行われた講演を第三部に収めている。本書は当初、「モラロジー関係者のための、むしろ内輪の読者層を念頭において公刊されたもの」（三版序）だったが、教育界をはじめ、広く一般にも読者層を得て、九版を重ねたのち昭和四十四年に改訂されるとさらに第五版まで出され、初版以来十四版を重ねている。またその過程で、愛知揆一文部大臣（当時）の推薦にもとづき、小泉信三の手配によって皇太子・同妃両殿下（当時）に

対して本書をテキストとして平塚により連続御進講されるに至った（改訂『日本教育の進路』第五版によせて）。なお、本書は『戦後道徳教育文献資料集』27（日本図書センター）にも収録されている。

（7）大沢俊夫「ソフィアの国際会議に参加して」『モラロジー研究所所報』昭和五十三年七月号、一二頁

（8）Joseph A. Lauwerys（1902-1981）教育学者。理学博士、文学博士、ロンドン大学名誉教授、大西洋教育研究所名誉所長、国際モンテッソーリ協会会長。昭和五十二年（一九七七）よりモラロジー研究所顧問。第二次世界大戦中、連合国文部大臣会議において設置された戦後の教育に関する特別教育問題委員会の委員長として、ユネスコの創設の中心的役割を果たしたことで知られている。ユネスコ憲章の前文の「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」は、ラワリーズの起草による（ラワリーズ「人生の意義」『モラロジー研究』十号、七頁）。略歴およびモラロジー研究所との関係の概要については『モラロジー研究所所報』昭和五十六年八月号の死亡記事「J・A・ラワリーズ顧問逝去される」および、小林哲也「ジョセフ・A・ラワリーズ博士の逝去を悼む」『日本比較教育学会紀要』第八号、昭和五十七年三月参照。最近の研究に、岩佐信道「J. Lauwerys の cosmic modesty の考え方と廣池千九郎の宇宙自然の法則」（『言語と文明』第十巻、平成二十四年三月）があり、ラワリーズの関連業績も参考になる。

（9）J・A・ラワリーズ「生と死」『モラロジー研究所所報』昭和五十五年十二月号、四頁。廣池千九郎は、オックスフォード出身者の「オクソニアン」（Oxonian）、ケンブリッジ出身者の「キャンタブ」（Cantabu）に倣い、道徳科学専攻塾の出身者を「モラロジアン」（Moralogian）と称することにした（廣池千英『モラロジー教育に関する基礎的重要書類』七〇頁。のち『人間教育における道徳の価値』一〇二頁に再録）が、その後意味が変容してこのころには、モラロジーを学び指針とする者もしくはモラロジー研究所の会員といった内容を表す語になっている。

（10）平塚益徳「序」、J・A・ラワリーズ著・平塚益徳監訳『科学・道徳・モラロジー』モラロジー研究所、昭和五十一年、三頁

（11）ラワリーズ前掲「生と死」四頁

（12）ラワリーズ前掲『科学・道徳・モラロジー』四頁

（13）同書、一〇九頁

（14）コールバーグに関する情報は、ローレンス・コールバーグ著、岩佐信道訳『道徳性の発達と道徳教育』広池学園出版部、昭和六十二年、まえがき参照。

（15）同書、まえがきV頁

（16）会議の討議内容は、モラロジー研究所編刊『道徳教育国際会議「東と西の道徳教育―伝統と革新」発表論文集』昭和六十三年、収録。第二回は同じく『第二回 道徳教育国際会議「二十一世紀の道徳教育を求めて」発表論文集』平成七年。

（17）アジア経済文化国際会議「グローバリゼーションと経済倫理」一九八九年十二月一日～三日。ビジネスエシックス東京国際会議「グローバル時代のビジネス・エシックス」一九九一年九月十日～十二日。第一回経済倫理世界会議「地球時代の経済倫理」（ISBEE〔経済ビジネス倫理国際学会〕との共催）一九九六年七月二十五日～二十八日。第一回モラルサイエンス国際会議「グローバル時代におけるコモンモラリティの探求」二〇〇二年八月五日～九日。ユネスコ国際シンポジウム「文化の多様性と通底の価値―聖俗の葛藤を

廻る東西対話―」二〇〇五年十一月七日～九日（ユネスコとの共催、会場・ユネスコ本部〈パリ〉。国際シンポジウム「文化多様性への新しい賭け―対話を通して通底の価値を探る―」二〇〇七年十一月五日～八日（ユネスコとの共催、会場・国連大学）。第2回モラルサイエンス国際会議「倫理道徳の理論と実践―モラロジーにおける廣池千九郎の業績の評価―」二〇〇九年八月二十四日～二十六日。

（18）『世界教育事典』の項目「モラロジー（moralogy）運動」も参照。「広池千九郎（1866～1938）の樹立した道徳学（道徳科学ともいう）の研究・普及・実践活動」とあり、廣池による道徳科学の体系化の経緯、内容と現在の研究、学校教育および社会教育の展開が解説されている（平塚益徳監修『世界教育事典』、帝国地方行政学会、昭和四十七年、三〇一頁）。

（19）山田孝雄『近代日本の倫理思想』大明堂、昭和五十六年、一八四頁

（20）中村元『比較思想の先駆者たち』広池学園出版部、昭和五十七年、一五一・一五四頁

（21）行安茂・廣川正昭編『戦後道徳教育を築いた人々と21世紀の課題』教育出版、平成二十四年、まえがきV頁

（22）『東京新聞』昭和四十七年六月十三日夕刊（『道徳科学研究所所報』同年八月号、一一頁再録）

（23）『モラロジー研究所所報』昭和四十八年一月号、一一頁

（24）同、昭和四十九年八月号、七頁

（25）山岡荘八『燃える軌道』第五巻、学習研究社、昭和五十三年、一三三六頁

（26）同、二四二頁

（27）山岡の廣池に関する小説『燃える軌道』執筆の経緯は、大澤俊夫「特集『燃える軌道』―広池千九郎博士と山岡荘八先生」（『れいろう』昭和五十四年六月号。のちに同『師の心を求めて』モラロジー研究所、平成十七年収録）に詳しい。山岡は「『徳川家康』も『織田信長』も『春の坂道』も、みんな『燃える軌道』を書くための習作にすぎない」と話していたという。「日本人への遺書」として、病苦を押して最後の力をふりしぼって執筆した様子などがよくわかる。

（28）行安・廣川前掲『戦後道徳教育を築いた人々と21世紀の課題』まえがき

（29）貝塚茂樹『戦後教育改革と道徳教育問題』日本図書センター、平成十三年、一七頁。天野は教育勅語に代わる「国民実践要領」の制定を目指したが、激しい反対に遭い断念せざるを得ず、個人名義で刊行した『国民実践要領』も「世間からはほとんど注目されることなく、すぎ去った」とみなされている（船山謙次『戦後道徳教育論史』上、青木書店、昭和五十六年、一二七頁）。詳細は、貝塚茂樹『戦後道徳教育の再考―天野貞祐とその時代』（文化書房博文社、平成二十五年）参照。

（30）山田孝雄前掲『近代日本の倫理思想』序言。なお、ここでは「第二次世界大戦後世界的に倫理学はふるわず、日本もまたその例にもれない」と世界的な傾向であることにも触れている。

（31）中村前掲『比較思想の先駆者たち』二六〇頁

（32）船山前掲『戦後道徳教育史』上、一二二・一二三頁

（33）林雅行『天皇を愛する子どもたち』（青木書店、昭和六十二年）には、モラロジー研究所と麗澤高校・大学で行われている天皇に関わる道徳教育が否定的に取り上げられている。

(34) 小学生用が三冊、中学生用が一冊。文部科学省のウェブサイトから閲覧できる。ただ近年、民間では増加傾向にあることは確かである。渡邊毅『道徳の教科書』（PHP文庫、平成十九年）では「天皇は日本の〝いのち〟」と章を立て、麗澤大学『大学生のための道徳教科書』（平成二十一年）には「道徳と学問」の章に「道徳系統としての日本皇室」（拙稿）の項があり、育鵬社『13歳からの道徳教科書』（平成二十四年）では第五部「誰かのために」に「天皇の祭祀」を設け、同『はじめての道徳教科書』（平成二十五年）では、「東日本大震災被災地に心を寄せる―天皇皇后両陛下」「民のかまど―仁徳天皇」に加え、式年遷宮、日本神話も取り上げている。

(35) 沼田健哉『現代日本の新宗教 情報化社会における神々の再生』創元社、昭和六十三年、第三篇。モラロジー研究所を新宗教に関連づけるものにはそれ以前にも、松野純孝『新宗教辞典』（東京堂出版、昭和五十九年）などがある。松野は「宗教法人ではないが」「新宗教の理解に資するために収めさせていただいた」という（本書「はしがき」）。

(36) 「『心なおし』の要素を取り出すと、新宗教とこれらの集団の類縁性は明白である」（島薗進『現代救済宗教論』青弓社、平成四年、五七頁）と、共通する一部を取り出し「類縁性」を指摘するが、それによって組織全体を論じるには無理があるだろう。

(37) 井上順孝ほか編『新宗教事典』（弘文堂、平成二年）に集約されている。

(38) 弓山達也『天啓のゆくえ 宗教が分派するとき』日本地域社会研究所、平成十七年など

(39) 中村元・武田清子監修『近代日本哲学思想家辞典』東京書籍、昭和五十七年、四八九頁

(40) 内田智雄『先学のあしあと』広池学園事業部、昭和五十五年、一四七・一六八頁。当の廣池はというと、追われた立場でありながら、天理教のことは自分を瀕死の大病から救ってくれた恩人として終生尊重していた。そして晩年に至るまで公然と報恩行為を続けている（モラロジー研究所編『廣池千九郎日記』⑥、広池学園出版部、昭和六十三年、一二六頁）。こうした「救済」と「報恩」との関係は、「理論」と「教理」との関係とは別の問題なのだが、混乱しがちなので整理して見ていかねばならない。

(41) 旧『道徳科学研究所紀要』第一号、昭和六年、一二六頁（『モラロジー研究』六十八号、平成二十三年所収）

(42) 廣池千九郎『道徳科学の論文』第二版、昭和九年、白鳥庫吉序文、八・一〇頁

(43) 『東京日日新聞』『報知新聞』『読売新聞』『時事新報』各紙とも昭和十年四月三日。『東京朝日新聞』（同日）はやや詳しく「皇祖天照大神を奉戴して我が最高道徳の根源を極め智徳一体の教育普及するため法学博士廣池千九郎氏が工費三十五万円で小金町大勝山山中に建設した道徳科学専攻塾開塾式は二日午後二時半より同塾講堂で盛大に挙行」などとある。いずれにせよ、天理教や宗教のことなどはまったく取りあっていない。

(44) 『東京日日新聞』（群馬版・昭和十一年十二月三日）にも「日本精神普及に谷川道場新設」の記事があり、廣池については、「法学博士廣池千九郎翁（七一）は有名な皇典研究の国宝的篤学者、多年研究の国史並に世界聖典哲学の粋を採り「モラロジイ」（最高道徳科学）といふ新学説を創立」とあり、ここでは「皇典研究」となっているがやはり国体研究が中心とみなされている。なお、いずれも天理教への言及はない。

（45）廣池が天理教に関係するのは同教の一派独立の後なので、独立運動には関わっていない。

（46）豊田寛三監修『図説 中津・日田・玖珠の歴史』（郷土出版社、平成十八年）では、「中津が生んだ生涯教育の先駆者」として廣池が挙げられている。廣池の地元の大分県および中津地方では、そのほかに大学の建設者としてなどにおいて近年顕彰が盛んになりつつある。

（47）近年では、『講談社日本人名大辞典』（講談社、平成十三年）、『日本思想史辞典』（山川出版社、平成二十一年）、『明治時代史大辞典』（吉川弘文館、平成二十五年）など、道徳や教育の分野だけでなく、一般的な辞典にも「廣池千九郎」の項目が立てられるようになっている。内容的には「歴史家（歴史学者）、教育者」と紹介されており、道徳科学専攻塾設立のほかには『古事類苑』など修史事業が主となっている。ちなみに『国史大辞典』（吉川弘文館、昭和六十年）には、「古事類苑」の項に編纂者の一人として名前が挙がるのみだった。

（キーワード：廣池千九郎、神道、道徳、教育）